

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名

北九州市教育委員会

I 概要

1 事業の概要

北九州市では、平成29年に策定した「北九州市特別支援教育推進プラン」の具体的な方向性である「合理的配慮の実践の蓄積」「文化・芸術、スポーツ等に接する機会の確保」「県立特別支援学校との連携」「『交流及び共同学習』の充実」「人権意識の向上」「個別の配慮を必要とする子どもたちを地域で支える意識の向上」等一つ一つの取組を、本事業を活用することで「線」として結びつけていくことを目指した。そのために、本市の7行政区のそれぞれに2校のモデル校を指定し、各区において障害者スポーツや文化・芸術活動を中心に特色ある取組を実施した。

(スポーツ)

- ・ 外部講師を招聘した講演や障害者スポーツの体験を通じて、障害のある方々が置かれている状況等について考えたり、個性や多様性を尊重する意識を育てたりする。
- ・ 「アダプティッド・スポーツ」を創作する活動を通じて、障害者スポーツやパラリンピックについての児童生徒の視野を広げ、障害者理解の素地づくりにつなげる。

(文化・芸術)

- ・ 絵画作品の制作やダンスを創作する等の芸術活動に共に取り組むことにより、相互理解の促進を図る。
- ・ 発表会や展示会等の機会を通じて、地域全体の障害者理解を含む人権意識の向上につなげる。

2 事業の成果

本市の7つの行政区において、特別支援学校(市立特別支援学校5校・県立特別支援学校2校)と小学校(4校)・中学校(1校)・高等学校(市立高校1校・県立高校1校)をペアにしてモデル校に指定し、各区において障害者スポーツや芸術活動を取り入れた特色ある取組を実施した。

各モデル校は年間計画を作成し、通常の学級においては「総合的な学習の時間」や「国語科」「学級活動」に、特別支援学校・特別支援学級においては「体育科」や「図画工作科」「作業学習」として教育課程に位置付けた。

障害者スポーツや障害者アートに造詣の深い講師を招聘し、モデル校の実態に応じた体験的・創造的活動と結びつけたプログラムを実践することで、障害者理解の素地づくりや相互理解の促進を図るとともに、個性や多様性を尊重する意識を育てることができた。

(スポーツ)

モデル校では、本市発祥の障害者スポーツ「ふうせんバレーボール」の普及団体「やまびこの会」や、福祉用具のレンタルや義肢装具などの製作・販売を行う「ものづくりのまち北九州」の代表格である「㈱有蘭製作所」の社員で当事者でもある車椅子バスケットボール経験者を講師に、障害のある方々のQOL等の講演を依頼し、「シビックプライド(郷土への愛着)」

の醸成や障害者理解の促進、社会参加の在り方等について考える機会とした。講演後のプログラムとして、障害の状況等に応じてルール等を工夫する「アダプティッド・スポーツ」のペギーボール、ディスクッター、ふうせんバレーボール、パラスポーツであるフロアバレーボール等を組み合わせて年間計画に位置付け実践した。障害者スポーツに関する講演と障害の有無を越えて笑顔で楽しめる様々なスポーツの体験を通じて、児童生徒の視野が広がり、障害者理解の素地づくりや相互理解に結びつけることができた。

モデル校の校長は本事業を推進するミドルリーダーを指名し、ミドルリーダーが率先してプログラムの進行や調整を行った。関係職員が視覚支援に必要な掲示物作製を分担するなど体制を整えたことで、スムーズな交流活動につながった。また、校長はリーダーシップを発揮して、プログラムの中に設定された表彰式や振り返りの場で講話を行い、個性や多様性を尊重する児童生徒の姿を価値付けた。さらに、学校だよりで取組を紹介したり、市民センターでの高齢者との交流会で実践したりする等、周知活動を行った。

本市教育委員会は、「スポーツ弱者を、世界からなくす」を合言葉に活動している「一般社団法人世界ゆるスポーツ協会」から講師を複数のモデル校に招くよう調整し、各モデル校へプログラムの内容に関する助言を行って、障害の有無、年齢、性別を越えた多様なスポーツの在り方について考える機会とした。さらに、オリジナルの「アダプティッド・スポーツ」を創作する活動を組み合わせて実施することにより、形式的な障害者理解にとどまらず、児童生徒が主体的にスポーツづくりに取り組み、ルールや道具を工夫するなど個性や多様性を尊重する意識の芽生えが見られた。また、本事業の一環として、児童生徒の各家庭等に配布される本市教育広報紙「未来をひらく」への掲載や本市教育委員会フェイスブック等のSNSを活用した情報発信にも取り組み、本事業の周知と障害者理解の促進に努めた。

（文化・芸術）

本市では、例年、市民会館等を会場として「特別支援学校・特別支援学級合同作品展」を開催している。モデル校では、本作品展への共同作品の出展を目指して、障害者アートに造詣の深い専門家を「障害者芸術文化応援センター」から招き、児童に障害者アートについて紹介してもらうとともに、共同作品の創作活動に取り組んだ。障害のある児童と障害のない児童が知恵を出し合い、互いに助け合って制作することにより、連帯感や成就感を高める機会となった。

本市教育委員会では、周知活動の一環として、「特別支援学校・特別支援学級合同作品展」で本事業の紹介コーナーを特設し、モデル校が制作した共同作品を特設スペースに展示した。さらに、マスコミへの情報提供を行い、地域全体への本事業の一層の周知と障害者理解の促進に努めた。展示期間中の来場者数は5,969人であった。

本市では、小学生の体力向上を目的とした「北九州キッズダンス」を創作しており、全小学校で実施している。県立の特別支援学校は市内に2校設置されているが、これまで「北九州キッズダンス」に触れる機会がなかった。県立の特別支援学校に本事業への参加を働きかけ、「北九州キッズダンス」に取り組めるようにした。モデル校では、児童が障害の有無を越えて一緒に楽しめるよう工夫する姿が見られるようになった。また、市立高校のダンス部の生徒達は、全国大会で入賞する実力を発揮して特別支援学校の生徒達の創作ダンスづくりを支援した。そのダンスは特別支援学校の文化行事で披露され、高等学校との連携が強化された。事業後の変容として、特別支援学校の生徒の対人関係への不安が解消された事例等が示され、本事業の推進により、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒の相互理解の促進を図っていくことの有益性や重要性を認識することにつながった。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

特別支援学校と小・中学校及び高等学校の校種による教育課程の違いや、市立・県立という設置者の違いによる学校行事の違い等により、年間を通じた日程調整に苦慮したモデル校が数校あった。そのため、窓口となる管理職・プログラムを推進するミドルリーダー、関係職員が共通理解の下に教師間の打合せを密にする必要がある。

各モデル校での児童生徒の姿から、本事業を活用した取組の強化や深化を図ることへの期待感が高まっている。本市教育委員会としては、児童生徒の変容だけでなく、通常の学級の担任などの教職員の意識の向上についても調査・分析していきたい。

（スポーツ）

障害のある児童生徒の中には、運動能力が高く会話も成立する者もあり、障害について見えにくい部分がある。一方、障害特性について事前指導を行っても、実際に会う場になって戸惑う様子が見られたモデル校もある。事前に教師間でお互いの学校見学や児童生徒の行動観察・情報交換を行う必要がある。

各モデル校はプログラムの拡充を希望しており、本市教育委員会が支援している「市民・学校・企業との連携による教材・教具・作品づくり」事業と連携して補助具を作成したり、ＩＣＴを活用したりして、新たなニーズや関心事に対応するとともに、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会への関心を高めることにつなげていきたい。

（文化・芸術）

交流を深めることへの成果として効果的だったのは、絵画作品の共同制作だけでなく、多くの市民が鑑賞する作品展に出品する等、目的意識をもった取組であったことや、年間を通じて他教科との関連を図り「障害のある人々の暮らし」や「点字」について調べて発表したり、アイマスクや車椅子体験を行ったりしたことが挙げられる。他のモデル校においても、広く市民への啓発に努め、年間を通じて他教科との関連を図ることを進めていきたい。